大西　浩次

作品キャプション
《NOBEYAMA ″L″&″R″》　（2015 年）
《野辺山、幽玄の月》　（2015 年）

私が星空を見上げるとき、いつも、星と星の間の何も見えない世界を想像する。この何も見えてない世界にも「確かに存在するもの」がある。私たちが、視覚として感知できるのは、可視光と呼ばれる波長400nm から 780nm の範囲に含まれる光子(photon)である。この範囲の外にも膨大な光（電磁波）がある。ただ、地球という環境で進化した人間の目では、これらを知覚することはできないのだ。星の卵である分子雲や、星が死んだあとのガスやダストたちの出す、弱くて波長の長い光たち（電波）を検出するために、人が考え作り上げてきた電波望遠鏡たちが、空を眺めている。いま、この望遠鏡の眺める宇宙の深さを想像しながら星空を写し取る。宇宙に対する思いの深さは天文学者もアーティストもおなじであろう。
これらの作品は、アーティスト・イン・レジデンス IN 野辺山のアドバイザーとして、国立天文台野辺山宇宙電波観測所に滞在した 2015 年 5 月 25 日から 5 月 28 日の間に、観測所内で撮影した作品である。「NOBEYAMA　″L″&″R″」(2015)は、野辺山宇宙電波観測所のミリ波干渉計 10m 電波望遠鏡たちだ。”R”の一番奥の天頂を向いている望遠鏡以外は、チリのアルマ観測所が完成したあと、深い眠りについている。”L”は月明かりを集めて輝いている。はたして、彼らは夢を見ているのだろうか。「野辺山、幽玄の月」(2015)は、観測内で見上げた雲間の月である。明るい月が雲に隠れ周りの雲を輝かせている。電波望遠鏡が眺めているはるか遠き分子雲を彷彿させる、地球表面の水蒸気「雲」の不思議な形が存在していた。私が星空を見上げるとき、いつも、はるか遠き宇宙の深さを想像する。確かに、私の目にも宇宙の誕生とも言うべき、ビックバーンからの光が飛び込んでくる。ただ、あまりにも弱いので、私の目の分子を励起することができないだけだ。ただ、想像力がこの少なさを補っている。そう、この何も見えてない世界にも「確かに存在するもの」がある。

プロフィール
理学博士・星景写真家
1962 年　富山県黒部市生まれ、長野県長野市在住
1988 年　小笠原沖にて皆既日食を撮影、星景写真を開始
1992 年　理学博士（ブラックホールの熱力学の研究）
2002 年　国立天文台 客員助教授（重力レンズ）
2006 年　日本星景写真協会設立
2010 年　国立天文台「はやぶさ」大気圏再突入観測隊として分光観測実施
2012 年　日本天文協議会「2012 年金環日食日本委員会」副委員長
2014 年　日本天文協議会「太陽系外惑星命名 WG」委員ほか

主な個展
「時空の地平線」(ライフパーク倉敷科学センターほか、2009 年～)、「時空の彩（いろ)」(明石市立天文科学館ほか、2011 年～)、「天空の記」(府中郷土の森博物館、2013 年～)、「時空の回廊」(志賀高原ロマ

ン美術館、2014 年)、「天空の樹」(田淵行男記念館、2015 年)、「時空の断章」(2015)、「風のいろ・清められた夜」(2015)

主な賞歴
2013 年　第 4 回田淵行男賞写真作品公募受賞
2009 年　IYA2009 Galilean Nights(世界天文年 2009)天体写真コンテスト 3 位
1999 年　第 3 回「ＡＭＡＴＲＡＳ展」石原慎太郎賞

現在：博士（理学)、長野工業高等専門学校一般科教授、日本星景写真協会副会長、国際天文学連合(IAU)会員、日本天文学会天文教育委員・ジュニアセッション実行委員長、天文教育普及研究会、日本天文協議会運営委員　ほか